

運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動する児童の育成
～めあてをもち、仲間とともに運動する体育の授業づくりをとおして～

1. 設定理由

本校の児童は、体を動かすことを好む児童が多く、休み時間には外で活発に遊ぶ姿が見られる。体育学習に関わる意識調査によると、体育学習を好み、体を動かすことに意欲的な児童が多いことが分かった。また、さまざまな領域の活動の中で、友だちの動きのよさに気づいている児童も多数いた。反面、自ら考え、主体的に問題解決をしようとする意識が低く、自分の課題にあわせてめあてを設定できない児童が多かった。

そこで、体育科学習において、児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫や、仲間とのかかわりが持てる場を工夫、学習カードや資料提示の仕方を工夫していくことで、「わかる」「かかわる」「できる」喜びを味わうことができ、一人ひとりがめあてを持ち、仲間とともに、進んで運動することができるであろうと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

体育科学習において、児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫や、仲間とのかかわりが持てる場の工夫、学習カードや資料提示の工夫をしたりすれば、一人ひとりがめあてをもち、「わかる」「かかわる」「できる」楽しさや喜びを味わえ、進んで運動することができるであろう。

3. 研究内容

(1) 学習指導要領体育科及び研究主題についての理論研究

(2) 授業実践による仮説の検証

ア 児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫

イ 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

ウ 学習カードや資料提示の工夫

4. 結 論

- チームの作戦の例、個人のめあての例を発達段階に応じて示すことによって、自分たちのチームに合った作戦や個人にあてはまるめあてをもつことができることが分かった。
- 仲間とのかかわりが持てる場を意図的に取り入れたことで、児童相互のかかわりが豊かになり、教え合ったり、競い合ったりするよさを味わうことができ、仲間とかかわり合う楽しさを味わうことができることが分かった。
- 発達段階や運動の特性に合わせた学習カードを工夫することで、具体的なめあてを持つことができるようになることが分かった。

1. 研究テーマ

運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動する児童の育成

～めあてをもち、仲間とともに運動する体育の授業づくりをとおして～

2. テーマ設定の理由

(1) 学校教育目標から

本校では、新しい時代をたくましく生きる児童の育成に向け、「心身ともに健康で、共に磨き合う子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、次の4点をめざす児童像として設定している。

- よく考え、進んで学習する子ども <知>
- 礼儀正しく、思いやりのある子ども <徳>
- 健康に関心を持ち、力いっぱい運動する(遊ぶ)子ども <体>
- 郷土を愛し、仲よく助け合う子ども <情>

この学校教育目標を達成するために、2012年度より3年間「考える力」を育てる算数科学習について研究に取り組んできた。2015年度からは、新しい時代をたくましく「生きる力」の育成のため、「健康に関心を持ち、力いっぱい運動する力」を養うことが子どもたちにとっての重要な課題であると考え、体育科学習の研究に取り組んでいる。本年度も昨年度の研究主題を引き継ぎ、体育科学習をとおして、運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動する児童の育成を目指し、教育目標の具現化を図りたいと考える。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、体を動かすことを好む児童が多く、休み時間には外で活発に遊ぶ姿が見られる。体育学習に関わる意識調査によると、体育学習を好み、体を動かすことに意欲的な児童が多いことが分かった。また、さまざまな領域の活動の中で、友だちの動きのよさに気づいている児童も多数いた。反面、自ら考え、主体的に問題解決をしようとする意識が低く、自分の課題に合わせためあてを設定できない児童が多かった。2年間の研究では、まずは、子どもたち自身が自分の課題に合わせためあてを持てるようになることを目標にして体育の授業作りに取り組んできた。本研究をとおして、めあてを持ち仲間を意識しながら、運動に取り組める児童が増えた。また、「練習を積み重ねていくことで、自分もその運動ができるようになると思う」や「自分は運動ができると思う」という自己肯定感が向上してきているが依然として低かった。これは、運動技能や学び方の個人差により、運動の特性に触れた楽しさを十分に味わうことができなかったことと、児童どうしの「かかわり合い」「認め合い」がこれまでの体育学習をとおして十分に行われなかったことによるものであると考えられる。

そこで、本年度は、体育科学習において、児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫や、仲間とのかかわりが持てる場を工夫、学習カードや資料提示の仕方を工夫していくことで、「わかる」「かかわる」「できる」喜びを味わうことができ、一人ひとりがめあてを持ち、仲間とともに、進んで運動することができるであろうと考え、本主題を設定した。

(3) 教育の今日的課題から

現代の社会では、生活様式の変化により、運動する機会の減少や生活習慣の乱れとともに、子どもの体力・運動能力の低下、肥満などの生活習慣病の増加が深刻な問題となっている。高齢化社会を迎えた日本で長い人生を豊かに生きていくためには、「生きる力」の根幹をなす健康な心と体を作るため、子どもの頃から、運動の楽しさを知り、主体的に運動することが求められている。

また、学習指導要領では、生涯にわたって健康を保持し、豊かなスポーツライフを実現することを目指している。それには、基礎的・基本的な動きを身につけたり、運動経験を豊かにしたり、運動の日常化を図ることが大切であると考えられる。

3. 研究目標

運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動する児童を育成するための学習のあり方を、体育科の授業の実践をとおして明らかにする。

4. 研究の仮説

体育科学習において、児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫や、仲間とのかかわりが持てる場の工夫、学習カードや資料提示の工夫をしたりすれば、一人ひとりがめあてをもち、「わかる」「かかわる」「できる」楽しさや喜びを味わえ、進んで運動することができるであろう。

5. 研究内容

(1) 理論研究

ア 学習指導要領体育科についての理論研究

イ 研究主題についての理論研究

(2) 授業実践による仮説の検証

ア 児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫

イ 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

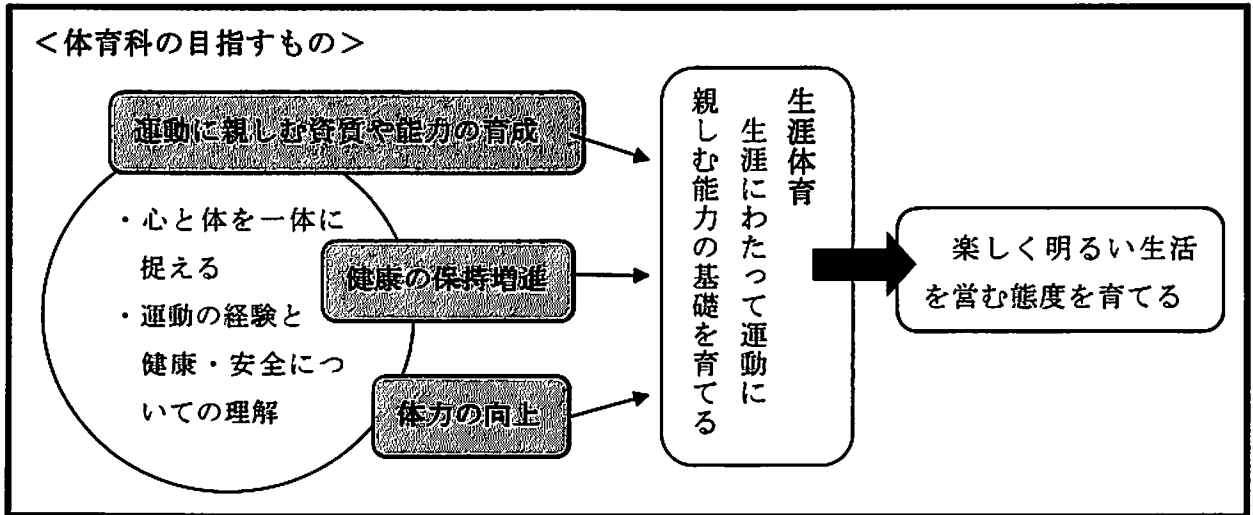
ウ 学習カードや資料提示の工夫

1. 理論研究について

ア 学習指導要領体育科についての理論研修

学習指導要領で述べられている体育科の究極的な目標である「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」ための3つの具体的な目標として「運動に親しむ資質や能力の育成」「健康の保持増進」「体力の向上」が示されている。相互に密接な関連があることも同時に表している。

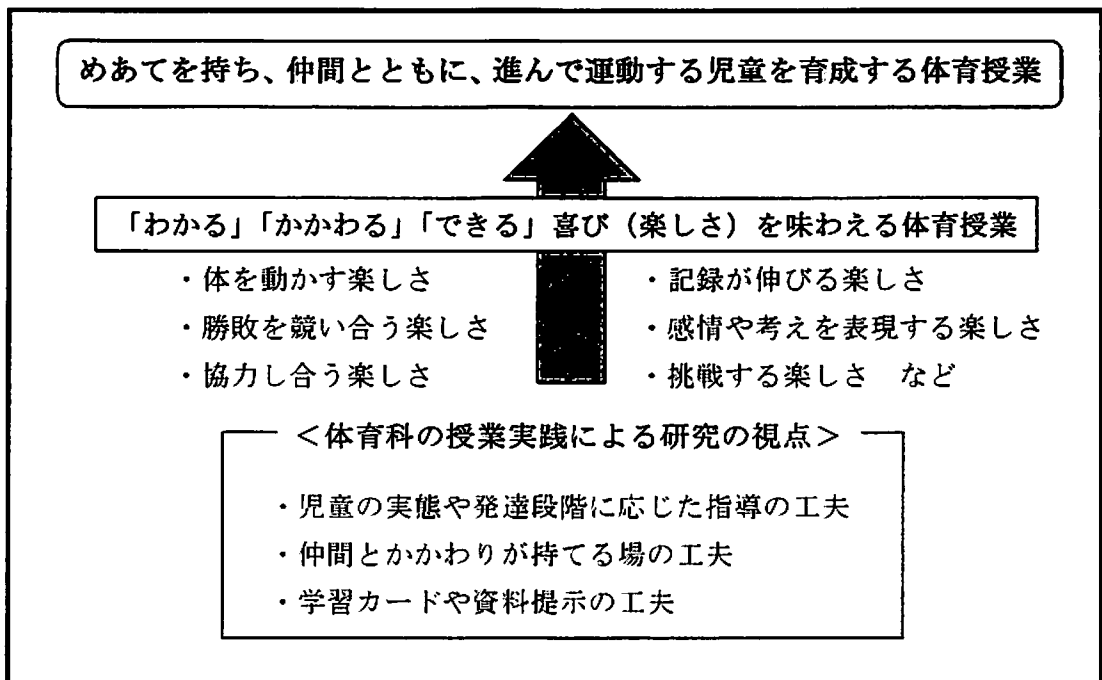
《資料1 体育科の目指すもの》



イ 研究主題についての理論研修

小見川北小学校の児童の実態を考慮し、授業実践による研究の視点について考察し、共通理解を図った。

《資料2 めあてを持ち、仲間とともに、進んで運動する児童を育成する体育授業の手立て》



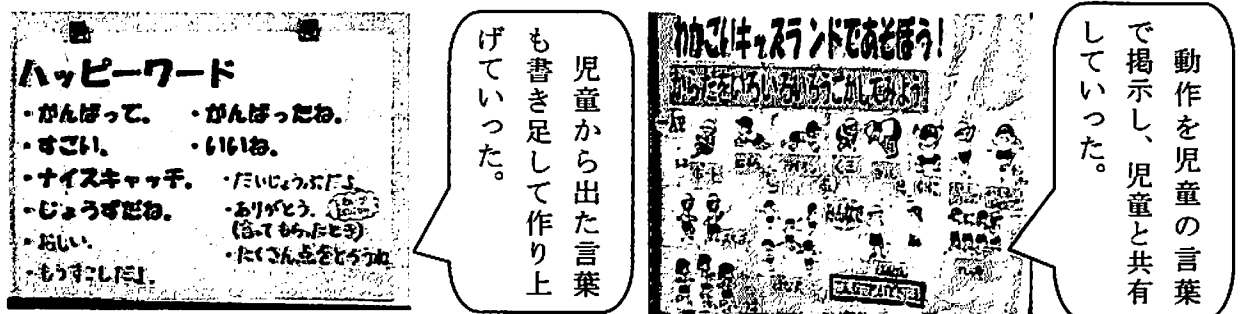
2. 体育科授業実践における仮説の検証

(1) 児童の実態や発達段階に応じた指導の工夫

仲間とのかかわりを教員側が意図的に増やしても、どのようにかかわっていけばよいのかという子どもたちの発達段階に応じた指導の工夫が必要であった。そこで、単元全体を通して、進んで「声かけ」ができるように、「声かけ言葉」の例示を掲示した。例示には、児童から出された言葉を整理し、ハッピーワード（一人ひとりが気持ちよく取り組める声かけ）、ポイントワード（一人ひとりの技能の向上をめざす声かけ）を示し、活用できるようにした。そうすることで互いのよさに気付き意欲の向上につながった。予想される声かけは教員側で例示したが、児童から出た言葉は、あとから付け足した。

《写真1》

また、活動の中でのかかわりを、より技能面の向上と結びつけるには、児童の間での気付きやアドバイスをより精選していく必要があった。そこで、発達段階に応じて、児童の発言をもとに動きの名前をつけたり、動きのこつをキーワードで示したりした掲示物を用意した。《写真2》



《写真1 2年 児童の発言をいかした声かけの例示》

《写真2 1年 学習の中で見つけた動きを図示する》

また、学習の実態に応じて用具や場の工夫をした。特にボールについては、重さ・大きさ・弾み具合などを吟味しながら、扱いやすいボールを使用した。場については、コート大きさやゴールの高さの検討をして整えた。その結果、意欲的に学習に取り組むことができた。

(2) 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

「心と体を一体としてとらえ」は、小・中学校の学習指導要領における体育科（保健体育科）の目標に示された共通の文言であるが、体育科は身体の健やかな成長につながると同時に、心の成長にも大きく寄与することを端的に表している。体育授業の「豊かな人間関係を培うことができる」という特性《資料3》は、本校の児童どうしの「認め合い」「励まし合い」などの体験不足により自己肯定感が低いという実態に対して、非常に効果的である。仲間との「かかわりあい」の中で生まれる喜びは、めあてを持ち進んで運動する児童の育成につながると考え、「仲間とのかかわりが持てる場の工夫」を授業づくりの一つの視点とした。

《資料3 人間関係を培う体育授業の特性》

- 1 グループ（集団）での活動場面が多い。
- 2 勝敗をとまなうことによる葛藤場面が多い。
- 3 技能向上に向けた協力・支援活動が多い。
- 4 言語の自然表出場面が多い。
- 5 めあての明確化による感動場面が多い。

『体育科教育学入門』（高橋健夫 編著 大修館書店）より抜粋

《資料4 体育科の授業の中で考えられる児童間のかかわり》

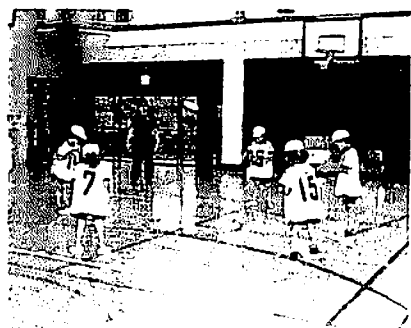
- ・仲間とグループ内での有効な協力関係を構築するためのかかわり
- ・仲間と共々めあてを設定し、それに立ちはだかる葛藤を克服するためのかかわり
（→清々しい達成感を味わうことができるという特性も体育には内在している。）
- ・技能向上のプロセスの中で児童生徒が支え合い、高め合うというかかわり
- ・他教科とは比較にならないほど自然発生的な言語活動によるかかわり

『体育科教育学入門』（高橋健夫 編著 大修館書店）より抜粋

本校では、上記の児童間のかかわりを具体的かつ意図的に単元の中にどのように設定していくかという工夫を行った。実践としては、ゲームの領域で、チームで協力して子どもたちが主体となって進める準備運動やドリルゲーム・タスクゲームを取り入れた実践もその一つである。準備運動、練習、作戦、そしてゲームと、学習活動のほとんどをチームで進めていった。《写真3》また、そのグループやチームでの活動に対応できるように、チームで作戦について話し合うときには、発達段階に応じて「作戦ボード」などを活用し、マグネットを動かしながらフォーメーションなどの具体的な話し合いができるようにした。様々な学習活動をチームで協力して行うことで、チーム内の絆を深め、仲間と協力することの大切さやすばらしさを感じさせることができた。《写真4》

各学年ともに、授業の終わりには、活動の振り返り、互いに認め合う場を設定した。進歩・向上が見られた児童を紹介する場面を設定し、仲間とのかかわりの中で自分の努力が認められているという気持ちを高める事ができるようにした。《写真5》

仲間とのかかわりが増えたことで、動きの良さやポイントを指摘し合えるような人間関係の深まりも見られるようになった。《写真6》



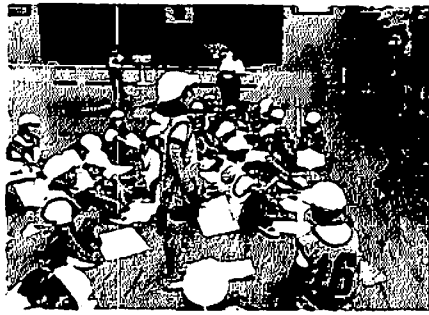
チームで、主体的にドリルゲームやタスクゲームをすすめていく児童。



実際の動きと同じように動かしてみても、確認した。

《写真3 2年 チームで協力して進める準備運動やドリルゲーム・タスクゲーム》

《写真4 4年「作戦ボード」を使つての話し合い》



認め合うことで満足して毎時間を終えられる安心感。



お互いに伝え合える学級の雰囲気づくりにつながった。

〈写真5 4年 振り返りでの互いに認め合う場の設定〉

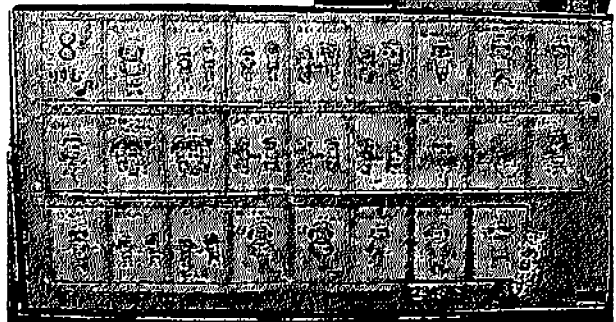
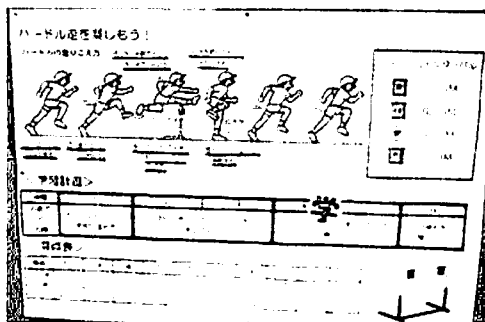
〈写真6 5年 ペアで互いに指摘し合える場の工夫〉

(3) 学習カードや資料提示の工夫

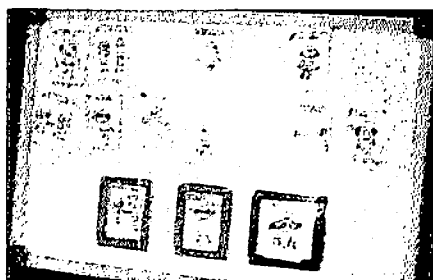
学習のまとめとして記録会や発表会を行う内容については、単元全体の見通しを子どもたち自身も持てるように、資料提示を工夫した。技能面のポイントも合わせて提示したり、子どもたちと一緒に毎時間積み重ねていく形式をとったり、発達段階に応じて工夫した。〈写真7、8〉

さらに、それぞれのグループや個人で使用する学習カードやボードには、ねらいにそって技や振り付けのポイントが分かるような資料を掲示することで、時間をかけずに、焦点を絞って練習しながらその場で振り返り、見直すことができた。〈写真9、10〉

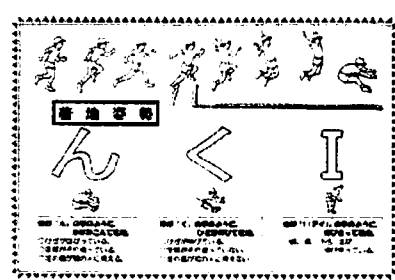
また、学習カードにおいては、単元の内容やねらいに応じて、「個人の学習カード」の他に「チームで1枚の学習カード」を用意する方法も取り入れた。ドリルゲームにおけるチームの記録を毎時間記入し、チーム全体での技能の伸びを実感できるものにした。また、1時間毎の技能面の伸びを自己評価で点数化していくことにより、意欲の向上を図った。〈写真11、12〉



〈写真7、8 5年・1年 単元全体の見通しがもてる学習掲示物〉



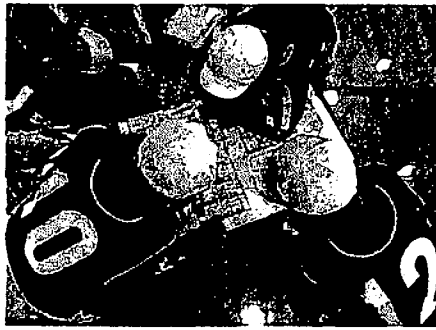
いろいろな動きの中から選んで構成できる資料。



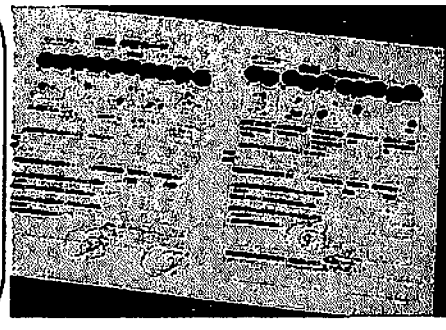
わかりやすい言葉に置き換えてポイントを示した図。

〈写真9 1年 振り付けが視覚的にわかる資料〉

〈写真10 6年 動きのポイントを示した資料〉



チームとして作り上げる学習カード。



めあてが持て、達成感が味わえる学習カード。

〈写真11 5年 チームとしての伸びやめあてが確認できる学習カード〉

〈写真12 3年 一人ひとりがめあてを持てる学習カード〉

4. 研究の成果と課題

(1) 児童の意識の変容

体育科学習において、児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫や、仲間とのかかわりが持てる場の工夫、学習カードや資料提示の工夫をしたりすることで得られる児童の意識の変容について以下のような体育科学習に対する意識調査を行った。年度始めや年度末に実施（2014年度9月・3月、2015年度4月・3月、2016年度4月・7月・3月、2017年度4月・7月）し、意識の変容を分析した。ここには、各年度末の意識調査の結果を示した。（2017年度は7月までの集計結果）

※小数第2位切り上げ

質問項目		回答	2014	2015	2016	2017
1	体育では、先生の話きちんと聞いています。	はい	81.0%	90.6%	<u>92.7%</u>	<u>94.2%</u>
		どちらでもない	18.4%	8.9%	7.3%	3.7%
		いいえ	0.6%	0.6%	0.0%	2.1%
2	体育で体を動かすと、とても気持ちがいいです。	はい	82.9%	77.2%	75.1%	81.5%
		どちらでもない	13.7%	18.3%	14.1%	12.7%
		いいえ	3.4%	4.4%	10.7%	5.8%
3	体育のとき、どうしたら運動がうまくできるか考えながら学習しています。	はい	66.3%	67.2%	74.1%	74.6%
		どちらでもない	25.1%	21.7%	17.1%	16.4%
		いいえ	8.6%	11.1%	8.8%	9.0%
4	体育では、いたづらや自分勝手なことをしません。	はい	74.6%	82.8%	<u>89.8%</u>	<u>88.9%</u>
		どちらでもない	18.1%	15.6%	7.3%	9.0%
		いいえ	7.3%	1.7%	2.9%	2.1%
5	体育で運動するとき、自分のめあてを持って学習します。	はい	47.4%	<u>65.0%</u>	<u>78.0%</u>	<u>75.7%</u>
		どちらでもない	34.3%	23.9%	15.1%	15.9%
		いいえ	18.3%	11.1%	6.8%	8.5%
6	体育が始まる前は、いつもはりきっています。	はい	74.9%	62.2%	72.2%	74.1%
		どちらでもない	17.1%	27.2%	18.0%	15.3%
		いいえ	8.0%	10.6%	9.8%	10.6%
7	体育は、みんなが楽しく勉強できます。	はい	77.0%	86.1%	<u>87.3%</u>	<u>87.3%</u>
		どちらでもない	13.2%	11.7%	9.8%	10.1%
		いいえ	9.8%	2.2%	2.9%	2.6%
8	うまい子や強いチームを見てうまくできるやり方を考えることがあります。	はい	68.6%	73.9%	78.0%	75.1%
		どちらでもない	14.9%	10.6%	12.7%	16.4%
		いいえ	16.6%	15.6%	9.3%	8.5%

9	私は、運動が上手にできるほうだと思います。	はい	37.7%	41.3%	<u>54.1%</u>	<u>54.0%</u>
		どちらでもない	32.0%	34.1%	26.8%	22.2%
		いいえ	30.3%	24.6%	19.0%	23.8%
10	体育では、自分からすすんで運動します。	はい	60.0%	57.8%	<u>71.2%</u>	<u>78.8%</u>
		どちらでもない	26.3%	31.1%	19.5%	13.8%
		いいえ	13.7%	11.1%	9.3%	7.4%
11	体育は、明るくてあたたかい感じがします。	はい	66.3%	68.3%	<u>76.6%</u>	<u>85.2%</u>
		どちらでもない	25.1%	22.8%	14.1%	10.6%
		いいえ	8.6%	8.9%	9.3%	4.2%
12	体育で学習した運動を休み時間や放課後に練習することがあります。	はい	38.3%	29.4%	44.9%	43.9%
		どちらでもない	27.4%	22.8%	23.4%	30.2%
		いいえ	34.3%	47.8%	31.7%	25.9%
13	体育を学習すると体がじょうぶになります。	はい	70.9%	72.2%	<u>75.6%</u>	<u>82.0%</u>
		どちらでもない	20.6%	24.4%	17.6%	13.2%
		いいえ	8.6%	3.3%	6.8%	4.8%
14	体育でゲームや競争で勝っても負けても素直に認めることができます。	はい	76.6%	80.6%	<u>89.8%</u>	85.7%
		どちらでもない	17.7%	15.6%	8.3%	11.6%
		いいえ	5.7%	3.9%	2.0%	2.6%
15	体育ではいろいろな運動が上手にできるようになります。	はい	68.6%	<u>80.0%</u>	78.0%	<u>81.0%</u>
		どちらでもない	26.9%	13.3%	14.6%	14.8%
		いいえ	4.6%	6.7%	7.3%	4.2%
16	体育では、友だちや先生がはげましてくれます。	はい	57.5%	65.0%	<u>71.7%</u>	<u>67.7%</u>
		どちらでもない	30.5%	22.8%	17.6%	21.2%
		いいえ	12.1%	12.2%	10.7%	11.1%
17	体育では、せいっぱい運動することができます。	はい	74.3%	79.4%	82.4%	<u>84.7%</u>
		どちらでもない	19.4%	13.9%	13.7%	10.6%
		いいえ	6.3%	6.7%	3.9%	4.8%
18	体育では、クラスやグループの約束ごとを守ります。	はい	78.4%	86.7%	<u>91.7%</u>	<u>93.7%</u>
		どちらでもない	17.6%	11.1%	6.8%	4.2%
		いいえ	4.0%	2.2%	1.5%	2.1%
19	体育では、少しむずかしい運動でも練習するとできるようになる自信があります。	はい	56.6%	65.0%	<u>72.2%</u>	<u>74.1%</u>
		どちらでもない	29.1%	22.2%	13.2%	15.3%
		いいえ	14.3%	12.8%	14.6%	10.6%
20	体育でゲームや競争をするときは、ルールを守ります。	はい	88.6%	92.2%	<u>96.6%</u>	<u>97.9%</u>
		どちらでもない	9.7%	7.2%	2.4%	0.5%
		いいえ	1.7%	0.6%	1.0%	1.6%

※ 網掛けは2014年度と比べ「はい」において10%以上向上した項目。

※ 調査項目については、診断的・総括的授業評価の調査項目を参考にした。

- 「体育では、先生の話をしっかり聞いています。」「体育では、いたずらや自分勝手なことをしません。」など、ほとんどの児童が学習に集中して取り組めるようになり、基本的な学習規律が身に付いた。
- 「体育で運動するとき、自分のめあてを持って学習します。」と答えた児童が急激に増加し、主体的に体育科の学習に取り組めるようになってきた児童が増えた。

- 「私は、運動が上手にできるほうだと思います。」 「体育では、少しむずかしい運動でも練習するとできるようになる自信があります。」 など、体育における自己肯定感が高まりつつある。
- 「体育では、友だちや先生がはげましてくれます。」 の質問については、「はい」と答えた児童が2014年度に比べ、20%増加し、教員側が授業の中に「仲間とのかかわりが持てる場の工夫」を意識して取り入れてきたことが児童の実感につながっていたといえる。
- 「体育で学習した運動を休み時間や放課後に練習することがあります。」 の質問については、「はい」と答えた児童が増加傾向にあるものの、依然体育科学習が運動の習慣化や日常化につながっているとは言い難い。

(2) 研究の成果

ア 児童の実態や発達段階に応じた指導の工夫

- チームの作戦の例、個人のめあての例を発達段階に応じて示すことによって、自分たちのチームに合った作戦や個人にあてはまるめあてを持つことができた。
- 児童の実態に応じて教具や用具を精選することができた。
- 指導案作成前後2回の模擬授業を行い、児童の反応を予測しながら授業の流れの組み立てを考えて授業に臨んだことにより、児童が主体的に運動に取り組む姿が見られるようになった。

イ 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

- 仲間とのかかわりが持てる場を意図的に取り入れたことで、児童相互のかかわりが豊かになり、教え合ったり、競い合ったりするよさを味わうことができ、仲間とかわり合う楽しさを味わうことができた。
- 「よくできているよ。」「がんばったね。」などの賛辞の言葉かけだけでなく、友だちの動きを見るポイントを示したことで、子どもたちどうしても、より具体的で、より効果的な言葉かけができるようになり、技能を高めるための具体的な言葉かけができるようになってきた。関わり合いの場が増えることが、技能の向上にもつながった。また、表現の領域では、友だちと関わりながら動きを作り上げ、一緒に活動することの楽しさを味わうことができた。
- ペアや全体でよい動きやチームの作戦を振り返ることで、全体で共有することができ、次時のゲームの意欲につながった。

ウ 学習カードや資料提示の工夫

- 発達段階や運動の特性に合わせた学習カードを工夫することで、具体的なめあてを持つことができた。
- 自分の課題に合った「めあて」をつくることができない児童が多かったが、学習カードに例示があることにより、課題に合っためあてをつくることができた。最初は、例示のままの言葉でめあてとしていたが、単元が進むにつれ、そこから発展させためあてを考えられるようになってきた。

- 振り返る項目を厳選したことで、短時間で焦点をしぼって授業を振り返ることができた。
- 学習を進めていく中で、自分のめあてが変わっていく児童も多く、その都度、学習カードや掲示物の絵を参考にしたり、撮影してもらった自分の動きの映像を分析したりして、新しいめあてを持ち、自らのさらなる技能向上に取り組む児童が多くみられた。

(3) 研究の課題

- 年間指導計画については、2年間で大きな単元として意識し、小学校6年間の見通しをもち、発達段階に応じた指導内容の体系化が図れるようにしていきたい。
- かかわり合い方については、チームでの作戦についての話合いや励まし合いの手立ての工夫に焦点を当ててきたが、よりよいかかわり合いの持たせ方について、引き続き研修していく必要がある。
- 「児童の実態や発達段階に応じた指導の工夫」、「仲間とのかかわりが持てる場の工夫」、「学習カードや資料提示の工夫」の3つの授業づくりの視点を持って研究してきたが、今後は実施可能な範囲で授業単位での形成的授業評価の導入なども考慮し、客観的に授業実践を振り返ることができるようにしていきたい。
- 子どもたちがかかわり合う場を確保しながらも、運動量の確保や技能面のさらなる向上が期待できるような授業のあり方について検討を重ねる必要がある。

第67次香取教育研究集会

第9-2分科会 保健・体育（体育）

8

運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動する児童の育成
～めあてをもち、仲間とともに運動する体育の授業づくりをとおして～

資料編

9 - 2

香取支部
香取市立小見川北小学校
江 越 雅 之

1. 指導にあたって

走り幅跳びは、短い助走から、調子よく踏み切って遠くへ跳ぶことの中で、跳ぶ動き自体の楽しさや心地良さを楽しめ、「走る」「踏み切る」「跳ぶ」「着地する」という、陸上運動の基本的な要素が含まれた運動である。また、勢いよく踏み切ったり、空中や着地の姿勢をコントロールしたりすることが求められ、瞬発力や調整力が高まる運動でもある。

本学級の児童は、体育の学習についてほとんどの児童が「とても好き」や「どちらかと言えば好き」と答えた。走り幅跳びについては、好む児童が多い中、記録が伸びずに「嫌い」と答える児童が数名いた。

走り幅跳びで、自分の記録を向上させる方法を考えさせたが、「筋肉をつける」や「練習する」、「速く走る」などの回答となった。また、仲間へのアドバイスについては、実践的な走り幅跳びの学習が少なく、走・跳の十分な能力を身に付けていないので、具体的な方策は考えられていない。

以上のような実態から、以下のような仮説を立て、指導にあたった。

授業仮説

走り幅跳びにおいて、一人ひとりが自分のめあてに応じた動きができる場を準備し、走り幅跳びのポイントが明確で、記録の伸びを得点化した意欲が向上する学習カードや、児童どうしで練習を見合ったり、良さを認め合ったりする機会を設けることで、意欲的に活動し、できる楽しさをより深く味わうことができるであろう。

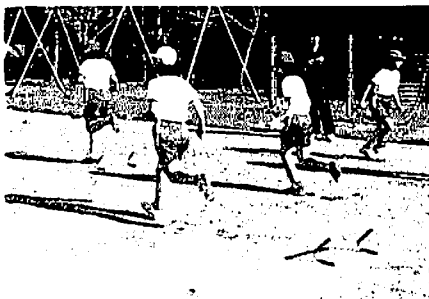
2. 指導の実際

(1) 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

○ 助走から跳躍、着地までの動きを身に付けるための教材の工夫と場づくり

準備運動から補助運動までの段階で、ただ走るだけではなく、ミニハードルやラダー、ケンステップなどを活用して、助走自体をリズムカルな動きにつなげていくことができた。《写真1・2》跳躍では、片足踏み切りの感覚を養うために、ケンケンやリード足を意識させる動きを取り入れた。《写真3》着地では、両足着地や、空中姿勢の感覚を身に付けるために、ボールを用いて高い位置へ跳躍する動きを取り入れた。《写真4》また、図解した動き「ん・く・I」と自分の動きを比較させ、より技能の高い動きを意識させることができた。

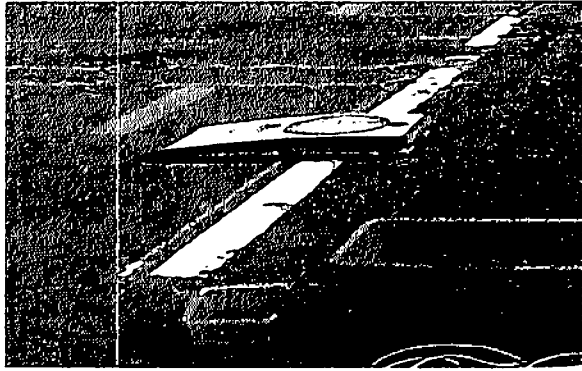
《資料1》



《写真1 助走のリズムを意識したミニハードル走》



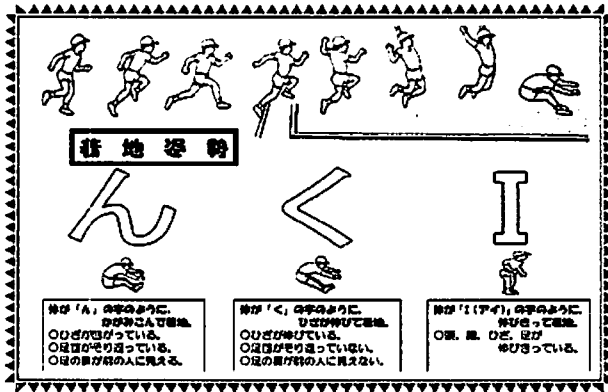
《写真2 リズム感覚を養うラダー》



《写真3 ケンステップなどの場》



《写真4 高い位置を意識した
ボールキャッチ》



《資料1 着地の図解例》

(2) 教具や学習カード、資料提示の工夫

○ ポイントがわかりやすい学習カード

「踏み切る」「跳ぶ」「着地する」の走り幅跳びのポイントをしっかり押さえた学習カードを用意したことで、絵をじっくりと見てから実践できたり、「タ・タ・ターン」や「フワッ」などのオノマトペを活用したりして、より動きのポイントがわかりやすくなり、自分自身に取り組んでいる動きが明確になった。その取組が、仲間どうしで見合う場面で有効的な手立てとなった。《資料2》

SUPER WAKAGOI KIDS Long Jumper's

名前: _____ 学年: _____

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
準備運動										
走り幅跳び										
着地										
振り返り										

指導者: _____

SUPER WAKAGOI KIDS Long Jumper's

走り幅跳びのポイント

助走 → 踏み切り → 空中姿勢 → 着地

① 助走: 速く走る → 足の力を強く出す → 体を高く上げる
 ② 踏み切り: 足を高く上げる → 体を高く上げる → 足を高く上げる
 ③ 空中姿勢: 体を高く上げる → 足を高く上げる → 足を高く上げる
 ④ 着地: 足を高く上げる → 足を高く上げる → 足を高く上げる

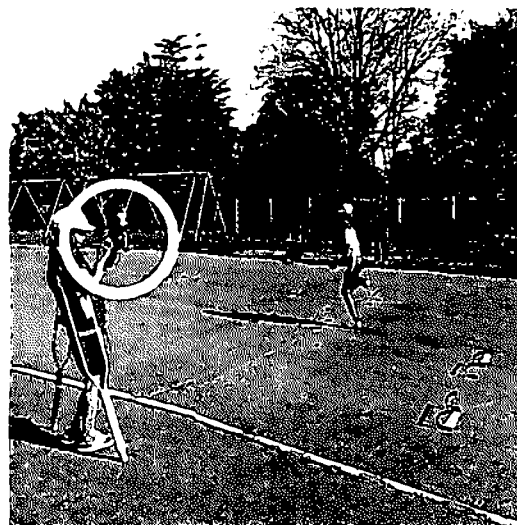
ポイントを示した学習カード

○ 視聴覚機器の活用

補助機材として、タブレット型コンピューターの視聴覚機器を活用し、自らの動きを、画面を通して確認していくことができ、一人ひとりが自分の動きや跳躍を確認することができた。そして、客観的に動きが確認できたことで、その後の課題が明確になった。取り組む場を選択することができたことで、自分自身の技能向上につなげることができた。《写真5・6》 また、休み時間でも映像を見返すことができ、撮影した仲間の動きを複数で見合いながら、アドバイスする姿が見られた。



《写真5 跳躍の動きの撮影》



《写真6 助走の動きの撮影》

3. 指導を振り返って

○ 個人のめあてをしっかりと持たせたことで、自分自身が取り組むべき課題を明確にすることができた《写真7》。そして、そのめあてを全体の場で共有することで、同じめあてに取り組む児童がわかり、お互い協力し合って活動する姿が見られた。また、学習を進めていく中で、自分のめあてが変わっていく児童も多く、その都度、学習カードや掲示物の絵を参考にしたり、撮影してもらった自分の動きの映像を分析したりして、新しいめあてを持ち、自らのさらなる技能向上に取り組む児童が多くみられた。

○ 単調になりがちな走り幅跳びだが、児童の実態や発達段階に応じた取組を実践していくことで、意欲的に活動することができた。《写真8》また、自らが立てためあてと、活動を実践してきた結果から、自己有用感が高まり、運動に親しむ児童の育成につなげることができた。



《写真7 めあての確認》



《写真8 意欲的に活動する児童》

1. 指導にあたって

(1) 児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫

挑戦している技のステップをクリアしていく方法をとることで、次のステップが分かり、最終的にはその技のポイントを順を追っていくと習得することができるようにした。また、同じ技に取り組む仲間と技のポイントを共有することで、見てもらう側はポイントを絞って見てもらえるので、的確に指示を受けることができ、見る側もポイントが絞られているためアドバイスがしやすくなった。同じ技に取り組む仲間どうしで見合ったり教え合ったりすることで、技の達成度を高めることができた。

(2) 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

児童の多くは、技の名前は知っているが、その技を上達させるためのポイントが分からずにいた。そこで、平面のマットだけを整然と敷くのではなく、その技に合わせた場を設定し、技の練習が確実にできるようなにした。また、技に合わせた場を自ら考え工夫したり、選んだりすることができるようにした。このようにめあてとする技を仲間と練習できる場があることで、さまざまな技のポイントやコツを理解できるようになり、技の習得につなげていくことができた。

(3) 学習カードや資料提示の工夫

技を行っている本人は、自分自身の技を自分で確認することができない。そこで、タブレット端末で自分の技を撮ったり、見たりすることができるようにし、自分の技のできばえが確認できるようにし、めあてとするポイントが押さえているか分かるようにした。

授業仮説

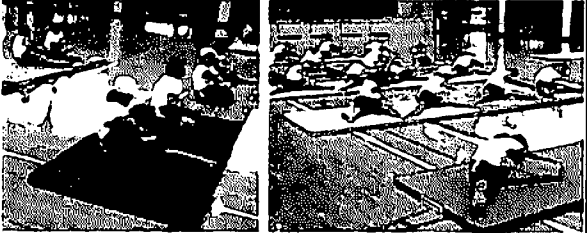



マット運動において、一人ひとりが自分のめあてに応じた技が確実にできる場を準備し、スモールステップのクリア型学習カードや視聴覚機器を用意すれば、児童どうしで練習を見合ったり、よさを認め合ったりすることで学習意欲を高めることができ、できる楽しさをより深く味わうことができるであろう。


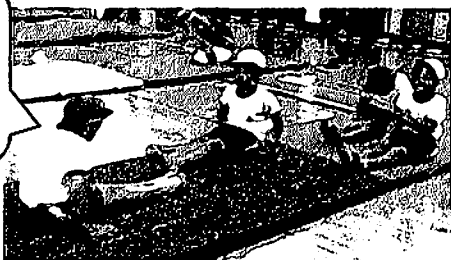
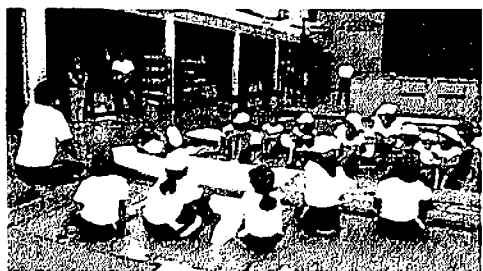
2. 指導の実際

(1) 本時の目標

課題の解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の場や方法を選ぶことができるようにする。(思考・判断)

(2) 本時の展開

過程	学習内容と活動	教員の働きかけと児童の様子
はじめ (11)	<p>1 学習の場づくりをする。</p> <p>2 あいさつをし、準備運動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備運動 ・柔軟運動を手首や足首、指、肩、首などを重点的に行う <p>3 基本運動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆりかご ・ゆりかごからの後転 ・かえるの足うち ・背支持倒立 ・ブリッジ ・前転 ・後転 	<p>入念な準備運動と柔軟運動</p> <p>○ マット運動で使う部位をしっかりと動かせるように声をかけ、十分ではない児童へは補助をした。</p>  <p>《写真1 柔軟をしっかりと行う児童》</p> <p>基本的な動きを徹底して身に付ける</p> <p>○ 簡単な動きだが、マット運動の基本的な動きである、支持することを身に付けさせた。</p>  <p>《写真2 基礎感覚作りを行う児童》</p>
なか (28)	<p>4 めあて①を確認する。</p> <p>回転系の技に挑戦しよう。</p> <p>・自分のめあてに合った技を練習する。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>マットに段差をつけて、後転を試みよう。</p> </div>  <p>《写真4 場の工夫》</p>	<p>自分のめあてを確認</p> <p>○ もう少しでできそうな技は何か、その為にどのような場が必要かを考えさせ、めあてをはっきりともたせた。</p>  <p>《写真3 めあての確認》</p>

	<p>・学習カードやビデオで技のポイントを明確にする。</p>  <p>《写真5 撮影をしてもらう児童》</p> <p>手で強く押し上げるようにするといよ。</p>  <p>《写真6 教え合う児童》</p> <p>5 できるようになった技を紹介する。</p> 	<p>○ 自分の動きを撮影してもらい、技の完成度を確認するように助言した。</p> <p>◎ 課題の解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の場や方法を選ぼうとしている。</p> <p>＜思考・判断＞（活動分析）</p> <p>○ 学習カードを見たり動画を見たりして、できていないところはどこか、練習方法は合っているかを確認するように助言した。</p> <p>○ 自分の課題に向かって、スモールステップを確認しながら実施したり、友だちどうしで見合いアドバイスをし合う行動が見られた。</p> <p>○ よい動きをしていた児童や、向上のあった児童を紹介した。また、ポイントが抑えられていたか全体で確認した。</p>
<p>まとめ (6)</p>	<p>6 全体でまとめをする。</p> <p>7 整理運動をして、後片付けをする。</p>	<p>○ 使った部位を中心に、しっかり整理運動をするように声をかけ、合わせて健康観察を行い、けが等の有無を確認した。</p>

(3) 指導を振り返って

- マット運動の技を一覧の図解で示したことで、児童は技の見通しがもて、さらにスモールステップで一つずつクリアしていくことで技を着実に身に付けることができた。
- 自らの技を撮影してもらい、自分の目で確認することができた。言葉だけのアドバイスでは分かりづらかったポイントも、自分が動いている映像を見ることで、どのようなポイントを意識すればよいか、必要な場は何かを考え、行動することができた。
- 場の工夫としては、まだ簡易的なものが多く、難易度が上がってきた場合のさらなる場の工夫が求められる。また、難易度が上がってきた場合の補助の仕方についても、同様に指導していく必要がある。

1 指導にあたって

(1) 児童の実態や発達段階に応じた指導方法の工夫

本單元では、オーバーハンドパスとアンダーハンドパスの技能定着に焦点を絞った3つのドリルゲーム（オーバーハンドパスゲーム、アンダーハンドパスゲーム、サークルパスゲーム）を取り入れた。児童には、事前にこれらのドリルで身に付く技能、その技能が試合でも活用できること、練習で注意すべき点を明確に示し、動きのポイントを意識しながら練習に取り組めるようにした。そうした活動からゲームの結果を得点化して毎時間継続して記録し、自分たちの技能の伸びが実感できた。

(2) 仲間とのかかわりが持てる場の工夫

ゲームの中で友達どうしがお互いによい動きを見つけ合えるパフォーマンスチェックを導入した。チェックする内容は、誰もが簡単にできるように、①オーバーハンドパス、②アンダーハンドパス、③相手への攻撃の回数を数えるものとした。これにより、ドリルゲームで練習してきたことがどれだけ実践で生かしているか、どれだけ技能が伸びているかを客観的に見られるようになり、このチェックを媒体として、チーム内で得点につながる動きをしようとする意識やコミュニケーションを高めることができ、実際の動きの質の向上につながった。

(3) 学習カードや資料提示の工夫

「自分のチームの特徴」を踏まえた上で、「チームの作戦」を考えたり、選択したりできるようにした。必要に応じて、作戦やそれに伴う練習の仕方を例示するなどの手立てを取った。また、ドリルゲームの結果を得点化して毎時間継続して学習カードに記録し、自分たちの技能の伸びが実感できるようにした。

授業仮説

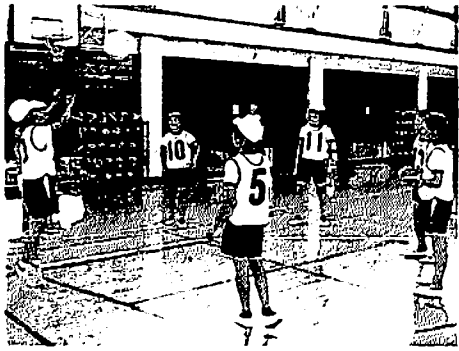

ソフトバレーボールの学習において、オーバーハンドパスとアンダーハンドパスの技能定着に焦点を絞ったドリルゲームを取り入れ、記録を得点化するとともに、得点につながる動きを高めるタスクゲームでお互いの動きのよさのを見つけ合うパフォーマンスチェックを取り入れれば、児童が自分たちの技能や動きの伸びを実感することができ、ソフトバレーボールの楽しさをより味わうことができるだろう。

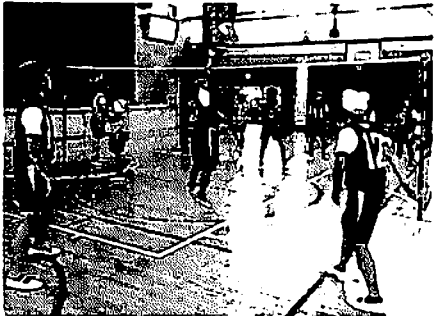
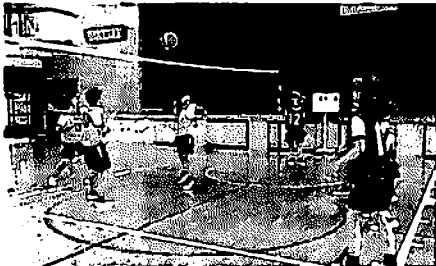

2 指導の実際

(1) 本時の目標

チームの特徴に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てることができるようにする。(思考・判断)

(2) 本時の展開

過程	学習内容と活動	教員の働きかけと児童の様子
<p>事前</p> <p>はじめ</p> <p>(5)</p>	<p>コートでの準備を協力して行う。</p> <p>1 集合し、整列、挨拶、健康観察をする。</p> <p>2 チームごとに準備運動やソフトバレーボールで必要となる基礎的な運動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備運動 ・体ほぐし ・簡単なパス 	<p>グループごとに行う準備運動</p> <p>○ 自分たちで計画的に準備運動がすすめられるようにした。各チームを回り、動きや健康状態を把握するようにした。</p>  <p>「みんなでラリーが続けられるように、準備運動のあとは、アンダーやオーバーでパスの練習をしよう。」</p> <p>《写真1 チームで活動し合う児童》</p>
<p>なか</p> <p>(32)</p>	<p>3 ドリルゲームを行う</p> <p>①オーバーハンドパスゲーム</p> <p>②アンダーハンドパスゲーム</p> <p>③チャレンジゲーム (オーバーハンドパスか、アンダーハンドパスをチームで選択)</p> <p>④サークルラリーゲーム</p> <p>4 めあてを確認する。</p> <p>○ 本時のめあてを確認し、チームの作戦を考える。</p>	<p>チームの記録を確認し、技能の伸びを実感</p> <p>○ ドリルゲームの結果は毎回チームの記録カードに記入し、学習の励みとした。①～④は合計で点数化し、苦手なパスも得意なパスでカバーでき伸びが出た。</p>  <p>《写真2 記録を確認し合う児童》</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">チームのとくちょうを生かした作戦を立ててゲームをしよう。</p>
<p>本時に出たチームの作戦の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の人しか触っていない。 → 全員でパスつないで返球しよう。 (オールパス作戦) ・ Aさんのジャンプが高い。 → Aさんにトスを上げるようにしよう。 (Aアタック作戦) ・ パスでしか返せない。 → しっかりトスを上げてみよう。 (セッター作戦) 		

	<p>5 タスクゲームで作戦を試してみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回返球ゲーム ・アタックゲーム など  <p>《写真3 作戦を試す児童》</p> <p>6 ゲームをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7人1チームで5チーム。 ・前半4分 ・作戦タイム2分 ・後半4分 サーブあり 1回返しなし 	<p>タスクゲームで実際に作戦を試してみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コートを縦に区切ったり、コート外からサーブを入れるところから始めたりして、実際に計画した作戦が機能するか試してみるタスクゲームを取り入れた。 <p>◎ チームの特徴に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てようとしている。</p> <p>＜思考・判断＞（活動分析）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ チームの特徴が出ている場面があれば、そのつど声かけをし、めあてや作戦に応じた練習方法についても助言した。  <p>《写真4 作戦を生かしてゲームをする児童》</p>
<p>まとめ (5)</p>	<p>5 本時のまとめと次時の予告をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習カードに個人の反省を記入し、全体で本時の学習を振り返る。 <p>6 後片付け、整理運動、健康観察、挨拶をする。</p>	<p>具体的によさを伝え認め合う場面設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ チーム内での良い動きや相手チームの良い動きなどできるだけ具体的に良さを伝え合えるように助言した。  <p>《写真5 振り返りを行う児童》</p>

(3) 指導を振り返って

- 本単元では、高学年として、ただ「作戦を立てる」のではなく、「チームの特徴に合った作戦を立てる」という点に焦点をあて、チームのよさと作戦を関連づけることを重点的に指導した。作戦が「アタックが打てる人がいるので、トスまでの動きを決める作戦」などに変化していき、ねらいを達成できた。
- 児童のパス技能が向上してきたことから、全体で「キャッチなし」というルールのもとゲームを行ったが、練習とゲームとでは勝手が違い、簡易化したゲームの特徴を活かしきれなかった。